

『クローディアスの日記』と『范の犯罪』の倫理

—「自己中心主義」とキリスト教との関連を中心に—

金 青 均*

目 次

はじめに
第一章「本統の生活」と「永遠の生命」
第二章「罪」と「赦し」
結び

<はじめに>

志賀直哉の『クローディアスの日記』は大正元年9月『白樺』に、『范の犯罪』は大正2年10月『白樺』に、それぞれ発表された。多くの先行研究において、両作品はいわゆる「自己中心主義」を代表する作品として論じられている。

その重要な先行研究を概観してみよう。

小林秀雄は「志賀直哉一世の若く新しい人々へ—」の中で、志賀直哉を「思索と行動が一致する作家」と指摘し、『范の犯罪』をその思索と行動の根本形式を見せてくれる作品としてあげている。¹⁾

井上良雄は「芥川龍之介と志賀直哉」の中で、芥川と志賀を比較し、論じている。この論文は、志賀を論じる際に、主として『范の犯罪』を中心にしているが、その論の中で、「志賀氏にとっては、意識活動のどの様な精到適確な判断も、生命の発作的な衝動力が今范に教へたこの解決以上に信頼すべきものはないのだ」²⁾と述べている。

宮越勉は「志賀直哉—尾道行前後の生活と文學—」において、クローディアスには、義母浩

* 高麗大講義部講師、日本近代文学

1) 小林秀雄「志賀直哉一世の若く新しい人々へ—」、『芸芸讀本 志賀直哉』、河出書房新社、1976年、10—17頁。(初出は、『思想』1929年12月)

2) 井上良雄「芥川龍之介と志賀直哉」、『日本文学研究資料叢書 志賀直哉』、有精堂、1970年、139頁。(初出は、『磁場』1932年3月)

に戀めいたものを懐いていた志賀直哉の姿が影を落としていると述べ、クローディアスは志賀直哉、兄王は志賀直哉の父、王妃ガートルードは義母浩と置き換えて読むことができると主張している。3)また、『范の犯罪』については、「范の妻」を志賀直哉の父ないし自家に、「牢屋の生活」を生活苦に、「本統の生活」を自己忠誠としての自活にそれぞれ置き換えて読むことができると言っている。4)

本多秋五は、『クローディアスの日記』は「ある行爲に對する、當事者の主觀的評価と、世間の客觀的評価との食い違いを見澄ました作品」5)と言っている。また、『范の犯罪』に触れ、「退っ引きならぬ對立に迫りこまれた場合には、人は戦わねばならぬ、戦う以上は勝たねばならぬ、という考えが意識下にあったようである。彼にあっては〈弱い〉ことは悪いことであり、〈強い〉ことは美であるのみならず、善でもあった」6)と述べている。

鶴谷憲三は、「クローディアスの形象化—『クローディアスの日記』を中心として—」の中で、『クローディアスの日記』を日常生活と想像力の世界との矛盾を示している作品として解釋する。7)佐藤義雄は「揺曳する〈自我〉—志賀直哉『クローディアスの日記』など—」の中で、「『クローディアスの日記』は、想像力に病んだ男の心の軌跡」8)と主張する。鶴谷憲三と佐藤義雄は『クローディアスの日記』をクローディアスの病的心理が描かれている小説として解釋する。

代表的な先行研究のいくつかを紹介したが、先行研究においては、多様な主張がなされていると言えよう。しかし、多くの先行研究において共通して指摘されていることは、兩作品には〈自我を貫く姿勢〉が浮き彫りになっているという点である。本論者もこのような先行研究の評価を否定するつもりはない。ただし、先行研究には、二つの作品に流れる「自己中心主義」の哲學や倫理觀などが、何に影響され、形成されているのかが見落とされている。

『クローディアスの日記』と『范の犯罪』とほとんど同時期には、『濁つた頭』と『大津順吉』も發表された。『濁つた頭』は、明治44年4月『白樺』に、『大津順吉』は大正元年9月『白樺』に、それぞれ發表された。この二つの作品をキリスト教との關連を視野に入れて論じることは妥当だろう。『大津順吉』と『濁つた頭』は、「姦淫とは何か」という主人公の悩みを巡って、小説が展開されており、そこにはキリスト教の性の倫理とそれに拮抗する性欲が描かれている。

これに對して、『クローディアスの日記』と『范の犯罪』には〈姦通〉の問題が小説のテーマになっているとは言えるものの、兩作品において、露わな形でキリスト教の倫理との關連を示唆

3) 宮越勉「志賀直哉—尾道行前後の生活と文學—」、明治大學文學部紀要『文芸研究』第43号、1980年、170頁。

4) 同上、184頁。

5) 本多秋五『志賀直哉』上、岩波新書、1990年、78頁。

6) 同上、102頁。

7) 鶴谷憲三「クローディアスの形象化—『クローディアスの日記』を中心として—」、梅光女學院大學日本文學會『日本文芸研究』第27号、1991年3月、133-140頁。

8) 佐藤義雄「揺曳する〈自我〉—志賀直哉『クローディアスの日記』など—」、明治大學文學部紀要『文芸研究』第78号、1997年9月、205頁。

する文面は見られない。そのせいか、先行研究においても、兩作品をキリスト教との関連の上で論じたものは少ない。

先行研究においては、これら四つの作品が同じ「自己中心主義の傾向」の作品として論じられている。しかしながら、『大津順吉』と『濁った頭』はキリスト教との関連で論じられるのに對して、『クローディアスの日記』と『范の犯罪』はキリスト教との関連で論じられることがほとんどないのが實情である。先行研究においては、内村門下としての体験が描かれている『濁った頭』と『大津順吉』はキリスト教との関連を視野に入れて論じる必要があるが、内村門下としての体験が描かれたとは言えない『クローディアスの日記』と『范の犯罪』は、キリスト教との関連という観点から論じる必要はないという暗黙の前提があるようだ。しかし、このような考え方が妥當であるかどうか批判的に見直す必要がある。

『濁った頭』、『大津順吉』、『クローディアスの日記』、『范の犯罪』の四作品は、発表時期が明治44年から大正2年までである。時間的に言って、この短期間に作家に大きな考え方の変化が生じたとは考えにくい。加えて、ある意味で似ている素材とも考えられる〈姦淫〉または〈姦通〉の問題を巡ってこれらの小説が展開されることに注目すると、この時期〈姦淫〉または〈姦通〉の問題は作家の問題意識の中心にあったとも考えられる。

『濁った頭』と『大津順吉』が〈姦淫〉の問題を巡って、明らかにキリスト教との関連をみせているのと同様、『クローディアスの日記』と『范の犯罪』も、〈姦通〉の問題を巡ってキリスト教との関連が内包されている可能性があると思われる。本論文では、〈姦通の問題〉への志賀のこだわり、また、『クローディアスの日記』と『范の犯罪』にみられる罪の意識などを根據に、兩作品がキリスト教との関連の上で論じられるべきであることを提示するのを目標とする。志賀の初期作品群にみられる「自己中心主義」は本質的なところにおいて、キリスト教と深く関わっていることを論証したい。

第一章 「本統の生活」と「永遠の生命」

本章では、兩作品を読み解くキーワードの一つであると考えられる「本統の生活」という言葉に、キリスト教の生命観の変容がみられることを提示したい。「本統の生活」という言葉は、『范の犯罪』においては、數回でていいるものの、『クローディアスの日記』にはでていない。しかし、『クローディアスの日記』においても、『范の犯罪』においても、主人公達が目指すところは、自分の意志にしたがって、まわりの状況に惑わされたくないということであり、その点において、兩作品に共通するキーワードとして、「本統の生活」という言葉を想定できると思われる。その兩作品の共通するところをこれから立証していきたい。

まず、『クローディアスの日記』をみてみよう。

『クローディアスの日記』のクローディアスは、言うまでもなく、シェイクスピアの悲劇『ハムレット』に登場するクローディアス、その人である。しかし、志賀直哉の造型したクローディアスは、『ハムレット』のクローディアスとはまったく別人である。『ハムレット』のクローディアスと『クローディアスの日記』のクローディアスがどこが違うのか、それが、作品分析の手がかりになるのであるが、まず、確認できることは、クローディアスが世間の慣習に挑戦する人物として描かれているという点であろう。次の引用をみてみよう。

自分は自分の仕た事を少しも恥ぢはしない。然し慣習からは愉快な事ではなかつたに相違ない。自分は少くとも此數箇月は喜びと苦しみとの間に彷徨してゐなければならぬだらう。

(『クローディアスの日記』、『志賀直哉全集』第二巻、岩波書店、1973年、4頁) 9)

上記引用の箇所には、クローディアスが「自分のしたこと」を恥じてはいないながらも、同時に、世間の慣習から苦しみも感じていることが述べられている。ここで確認しないといけないことは〈クローディアスのしたことは何を意味するのか〉ということである。シェイクスピアの『ハムレット』から考えてみると、ここで「クローディアスのしたこと」と考えられるのは二つある。一つは、兄王を暗殺し、王になったということであり、もう一つは、その兄王の妻と結婚したということである。この中で「兄王を暗殺し、王になったということ」は、志賀が「創作余談」の中で『クローディアスの日記』について言及し、『ハムレット』の劇では幽霊の言葉以外クローディアスが兄王を殺したといふ証拠は客観的に一つも存在してない¹⁰⁾と述べていること、また、『クローディアスの日記』にも、クローディアスが兄王を暗殺したと思われる箇所が箇所もないということから論外であると言える。クローディアスの言う「自分のしたこと」はあくまでも、兄王の妻を王妃として迎え入れたということである。當然、この結婚は、世間の慣習には反するものである。クローディアスは自分のしたことに世間の評価がどうであれ、それを乗り越えようとするが、それがそう簡単なことではないため、一方においては、苦しみも感じているのである。

上記引用でのクローディアスの言う「自分のしたこと」がもっとわかりやすく、具体的に表現されているのが「自分は今度の結婚を決して恥ぢてはゐない。少しでも恥づる心を持つてゐたら、自分の性質としてそれは到底出来る事ではない」(『クローディアスの日記』、10頁)という箇所である。上記引用の「自分のしたこと」に「今度の結婚」という言葉がまったくの対応関係にあることが確認できる。ここで一つ指摘しないといけないことは、クローディアスが、時間が経つにつれ、最初は「自分のしたこと」としてほやかに表現した「兄王の妻との結婚」が、やがて「今度の結婚」として明確な形で表現されているという事実である。『クローディアスの日記』は、作

9) 本論文での『クローディアスの日記』と『范の犯罪』からの引用は、上記の全集による。以下、兩作品からの引用の際、作品名と頁数のみを本文中に表記することにす。なお、旧漢字は常用漢字に改めた。

10) 「創作余談」、『志賀直哉全集』第八巻、岩波書店、1974年、7頁。

品全体がクローディアス書きたいいくつかの日記として構成されており、その日記の日付は書かれていないが、少なくとも作品に示される日記の順序は、日付の順序によるものであろう。このように、時間が経つにつれ、クローディアスが明確な形で、「兄王の妻と結婚したこと」を明らかにしているところから、クローディアスが世間の道徳に對して倫理的に自信をもつようになったと解釋することも可能であろう。しかし、實際においては、決してそうはみえない。クローディアスは、必ずしも自分の道徳性に自信をもっているわけではなく、弱い所も見せているのである。次をみてみよう。

自分はこれに對しては何處までも戦はねばならぬ。

が、さう思ひながら、今日自分は自身の内に、猶恐ろしい弱点のある事を不図感じた。それを今更の様に知つた。—それは自分の心の何處かに未だ潜んでゐる、安値な、慣習的な、所謂良心といふ奴だ。その裏切りである。 (『クローディアスの日記』、10—11頁)

クローディアスの言う弱いところが「慣習」として表れていることはすでに確認した。それが上の引用では「自分の心の何處かに未だ潜んでゐる、安値な、慣習的な、所謂良心という奴」として自覺されている。しかし、一方においてはクローディアスは世間の慣習については、それと戦う決心をしているのも事實である。

自分の道徳性を信じ「自分はこれに對しては何處までも戦はねばならぬ」と思うクローディアスと、「世間の慣習や安値な良心に縛られている」もう一人のクローディアスがいるのである。クローディアスはその思考において、単一の価値観を持っている人物であるとは言い難い人物であり、自分の信念の正當性を信じながらも、世間の慣習と言うものに縛られ、自分の信念を貫くことはできない人物である。この点、クローディアスは、行動と思考の狭間で悩み躊躇する人物だと考えられる。

もっとも、クローディアスが目指すところが何かは明確である。それは、クローディアス自身の道徳觀に従って、生きていきたいということである。それが、「兄王の妻との結婚」として作品中ではあらわれているのである。作品の中では、クローディアスの「兄王の妻」への戀愛感情は、「ハムレット」が生まれる前からのものとされている。クローディアスにとって、その戀が實らなければ、自分の人生はまったく意味のないものになってしまうかも知れないものであった。言い換えれば、その戀が實現しなければ、クローディアスの人生は〈生けるしかばね〉のようなものになっていたかも知れないものだったのである。要するに、クローディアスは自分の人生を意味のあるものにしようとするのと、生きる意味を吟味し、本當に人生らしい人生を営むことを目指しているのである。

このような考察を土台にし、『范の犯罪』の考察に入りたい。次をみてみよう。

私は私が右顧左顧、始終きよときよと、欲する事も思ひ切つて欲し得ず、いやでいやでならないものをも思ひ切つて撥除けて了へない、中ぶらりんな、うぢうぢとした此生活が總て妻との關係から出て來るものだといふ氣がして來たのです。自分の未來にはもう何の光も見えない。自分にはそれを求める欲望は燃えてゐる。燃えてゐないまでも燃え立たうとしてゐる。それを燃えさせないものは妻との關係なのだ。(中略) その不快と苦しみで自分は今中毒しようとしてゐるのだ。中毒しきつた時は自分はもう死んで了ふのだ。生きながら死人になるのだ。

(『范の犯罪』、85頁)

范はこれまでの自分の生活を振り返ってみて、自分の生活が躓いていることに氣付く。その原因になっているのは「妻との關係」なのである。そして、「妻との關係」が不快なまま續いたら、自分は「生きながら死人になる」と思うのである。范が目指すところは明らかである。〈生きながら死人になるような生活〉ではなく、〈生きているという自覺が得られる生活〉なのである。生の意味を吟味し享受できる人生なのである。このような考え方がもっと過激な形で表現されているのが、「破つても、破つても、破り切れないかも知れない。然し死ぬまで破らうとすれば、それが俺の本統の生活といふものになるのだ」(『范の犯罪』、86頁) という箇所である。この箇所には、「本統の生活」を営みたいという范の願望があらわれているのである。

『范の犯罪』という小説を理解するために、ぜひとも吟味しなければならないキーワードがある。〈本統の生活〉というキーワード、そして、〈生きながら死人〉というキーワードの二つである。この二つのキーワードを理解するために、〈本統の生活〉對〈偽りの生活〉という對立項目の設定、また、〈生きながら死人〉對〈偽りの生を生きる人〉という對立項目の設定が必要である。

そう考えた際に、浮かぶのが『新約聖書』にみられる生命の概念である。「生きながら死人」と言う時の「死人」が生物として死んだ人という意味ではないのは言うまでもない。ここでの「死人」は、死んだと同様の、生の意味を失った人の意味である。このように〈生物としての生命〉の概念を乗り越える生命の概念はキリスト教の生命概念に大きく支えられているように思われる。その説明のため、『新約聖書』にあらわれる生命概念がどのようなものなのか、聖書から引用したい。『新約聖書』にはその生命概念を読み取ることができる箇所が存在する。次は、それぞれ、「ヨハネによる福音書」11章と「マルコによる福音書」12章からの引用である。

イエスは言われた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか」¹¹⁾

11) 『新約聖書』「ヨハネによる福音書」11章25-26節。(共同譯聖書實行委員會『聖書新共同譯』、日本聖書協會、1987年)

神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。12)

上記引用の新約聖書の箇所には、イエスを信じることによって、〈本當の意味の生命〉が得られるということが説かれている。「わたしを信じるものは死んでも生きる」とイエスが語る時の「生きる」が、生理學的に言う〈生命がある状態〉ではないことは明らかである。ここでの「生きる」とは、〈生物學的な意味の生命を乗り越えた生命〉としての〈本當の生命〉が得られるという意味だろう。また、引用の箇所からキリスト教の神は〈本當の意味の生命をもたらす神〉であるということが述べられている。

この新約聖書の生命概念を理解するためには、新約聖書における命を指す言葉に注意する必要がある。新約聖書は紀元前後のギリシャ語の共通語であるコイナーで記された。教文館発行『旧約新約聖書大事典』によれば、「新約聖書における命については、まず三つのギリシャ語が考慮されねばならない」13)。ビオスは生活の意味であり、身体的な意味での生命にはしばしばプシュケーが用いられており、死と對立する命のことを指すのはゾーエーであると言う。14)その言葉の用例を、新約聖書を通して、確認しておきたい。「テモテへの手紙一」2章には、「わたしたちが常に信心と品位を保ち、平穩で落ち着いた生活を送るためです」15)とある。この箇所における「生活」という言葉が「生活」を意味するビオスの用例である。次に、プシュケーという言葉の用例をみてみたい。「マタイによる福音書」2章には、「ヘロデが死ぬと、主の天使がエジプトにいるヨセフに夢で現れて、言った。〈起きて、子供とその母親を連れ、イスラエルの地に行きなさい。この子の命をねらっていた者どもは、死んでしまった。〉」16)とある。また、「ヨハネによる福音書」10章には、「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる」17)というイエスの言葉が述べられている。これらの箇所における「命」とは、生物學的意味としての生命である。ゾーエーという言葉の用例をあげよう。「ヨハネによる福音書」1章には、「言の内に命があった。命は人間を照らす光であった」18)とある。また、「ヨハネによる福音書」5章でイエスは、「はっきりしておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁かれることなく、死から命へと移っている」19)と述べている。これらの箇所における「命」とは、生物學的な生命を乗り越える生命、キリスト教の信者が追求すべき生命なのである。キリスト教の教理によれば、生理學的な生命としての「プシュケー」と、本當の生命、永遠の生命としての「ゾーエー」という二つの生命があり、キリスト教はこ

12) 『新約聖書』「マルコによる福音書」12章27節。

13) 旧約新約聖書大事典編集委員会編『旧約新約聖書大事典』、教文館、1989年、137頁。

14) 同上、137頁。

15) 『新約聖書』「テモテへの手紙一」2章2節。

16) 『新約聖書』「マタイによる福音書」2章19-20節。

17) 『新約聖書』「ヨハネによる福音書」10章11節。

18) 同上、1章4節。

19) 同上、5章24節。

のうちの「ゾーエー」を追求する宗教と言っていいだろう。ここで重要なのは、このような生命概念がキリスト教獨特のものであるという事実である。

キリスト教の〈生と死〉の概念は、他の宗教思想と比較してみれば、その特質が把握できるだろう。まず、インド思想や仏教の場合をみてみよう。大久保雅行は「インドには、前世にも來世にも生と死を繰り返すという輪廻轉生の觀念や、生まれの貴賤や來世の安樂は人の行爲によるという因果応報の思想があった」と述べ、また、「仏教では死後の個我や靈魂の存在・存續は、無我説や無常觀において否定されてきた」²⁰⁾と説明している。伝統的なインドの宗教思想においても、仏教においても、神を信仰することによって、死後もなお、生き續けられるという「永遠の生命」という觀念はみられないのである。伝統的なインド思想においても、仏教においても、共通するところは、輪廻轉生の觀念であり、輪廻轉生の觀念は、人間は死後また生まれ変わり、別の生物學的な生を営むという考え方と結び付けられているのである。これは死後の生命としての「ゾーエー」という生命觀念を想定するキリスト教の教理とはかけ離れているものである。

生命觀念に關して、もう一つ指摘したいことがある。それは儒教の場合である。儒教の場合には、その主な關心は死後の世界に向けられていない。孔子の教えは、もっぱら現實世界での實踐道徳のほうに集中している。ところで、孔子の教えをもとに成立した儒教が宗教なる所以は祖先崇拜にあるように思われる。儒教体系の中で、子孫にとって祖先は神のような存在として捉えられている。人は子孫を残すことによって、その子孫の生を通して生が續けられるという觀念が儒教にはある。このような生命觀念が、神を信じることによって、死後もなお生き續けられるというキリスト教の生命觀念とはまったく異質なものであることは容易に把握できる。

このように、キリスト教の生命觀念は、他宗教の生命觀とは區別できる獨特なものであることを確認した上で、『范の犯罪』における范という人物の宗教について考えてみる必要がある。作品の中で、范はキリスト教の信者であるが、彼の信仰がどれほど堅實なものなのかは不明である。また、どのような動機で彼がクリスチャンになったのかもはっきりしていない。しかし、ひとまず、推測できることは、范は「妻との關係」に悩み、クリスチャンになった可能性が高いということである。と同時に、その信仰が彼の魂を救済する役割を果たしていないということも推測できる。「妻との体係」に悩み、「妻が死んでくれればいい」と考え、さらには「妻を殺してしまえばどうだ」という極端な思考に至る范の考え方は、敬虔なクリスチャンのそれとは程遠いものである。

しかし、ここで言えるのは、范が篤實なクリスチャンではなかったとしても、彼は少なくともキリスト教の影響下にあった人物であり、彼の言う「生きながら死人」と「本統の生活」という言葉には、キリスト教の生命觀が吸収されていると言わざるをえないという点である。范は、篤實な信仰はもっていないなくても、息が詰まるような「妻との關係」を打開して、何か意義ある人生

20) 中村元監修、峰島旭雄責任編集『比較思想事典』、東京書籍、2000年、451頁。

を営みたいという願望をもっていた。そして、その願望はキリスト教のキーワードの一つである「永遠の生命」と結び付けられ、范のいう「本統の生活」として表現されたと思われる。キリスト教の信者ならだれでも追求する究極の生命としての「永遠の生命」は、生きる意味を享受できる生活を追求する范においては、究極の生活を意味する「本統の生活」という言葉としてあらわれたと考えられる。「本統の生活」という言葉は、キリスト教の「永遠の生命」という言葉を范なりに変容したものであり、この言葉が意味するところは〈自分の自我を徹底して貫く生活〉ということだろう。

このように考えた際、『クローディアスの日記』におけるクローディアスと、『范の犯罪』における范という人物の共通性が明らかになる。『范の犯罪』の范は、「本統の生活」を目指したいという願望を見せている。これに對して、『クローディアスの日記』のクローディアスは、「本統の生活」という言葉を日記には記していないが、彼の目指すところは范の場合と同様、「本統の生活」、つまり、〈自我を徹底して貫く生活〉であると考えられる。このような点から、神を信じることによって魂が救済されるという生命観念を表すキリスト教のキーワード「永遠の生命」が、兩作品においては変容され、〈自我を徹底して貫く生活〉を表すキーワード「本統の生活」として表れていると考えられる。

ここで、一つ付け加えておきたいことは、「生命」、「人生」、「生活」を表す言葉は、英語においては、すべて「life」になるということである。作家志賀直哉は、英語の「life」という単語が「生命」、「人生」、「生活」という意味を同時に持っていたのと同様、この三つの単語を明確に使い分けることはあまり意識していなかったかも知れない。

第二章 「罪」と「赦し」

前章では、『クローディアスの日記』と『范の犯罪』におけるキリスト教の生命観念との関連について考察してきたが、兩作品において、もう一つ、キリスト教との関連を読み取ることができるポイントがある。それは、キリスト教における「罪」と「赦し」の観念である。

兩作品にみられる「罪」と「赦し」の観念と、『新約聖書』の関連箇所を比較、考察してみたいと思う。まず、『クローディアスの日記』の次の箇所ををみてみたい。

その時どうしたのか不意に不思議な想像がふッと浮んだ。自分は驚いた。それは兄の夢の中でその咽を絞めてゐるものは自分に相違ない、かういふ想像であつた。すると暗い中にまざまざと自分の恐ろしい形相が浮んで來た。自分には同時にその心持まで想ひ浮んだ。—残忍な様子だ。残忍な事をした。…もう仕て了つたと思ふと殆ど氣違ひのやうになつて益々烈しく絞めてかかる、其自身の様子がはつきりと考へられるのである。（『クローディアスの日記』、21頁）

この箇所は、クローディアスが秋のある寒い晩、狩場で兄王といっしょに泊まった時の話である。兄王が、まるで首でも絞められるように、悪夢で苦しんでいる場面でのクローディアスの想像である。悪夢の中で、兄の首を絞めているのは、クローディアス自身ではないかと想像するのであるが、問題はその想像によってクローディアスが、実際に兄王の首を絞めたように錯覚し、罪の意識で悩むという点である。この箇所は、「罪」の成立条件を心の動機から探るキリスト教の「罪」の概念と通じるところがあると思われるが、その論証のため、キリスト教の罪の概念をみてみたい。

キリスト教の罪の概念について、武田清子は「〈罪〉は、悪であるが、社会の規範を犯した悪行や刑罰を科せられる不法行為や法律上の犯罪 (crime)、あるいは仏教の輪廻思想による業 (カルマ)、その他がある。キリスト教は罪を“sin”あるいは原罪 (original sin) として把握する」と述べ、「キリスト教において罪は神に背くこと、神に對する不服従、神への反逆、神の愛の拒絶である」と言う。²¹⁾要するに、キリスト教における罪は、一般の法律を犯したかどうかによって成立するものではなく、基本的に神との関係の上で、神に背いた時に成立するものである。したがって、キリスト教における罪というのは、法律上の罪の範囲を越え、より厳しく規定される場合がある。キリスト教においては、心の中での罪を論じているのである。次は、「マタイによる福音書」5章27-28節からの引用である。

あなたがたも聞いているとおり、「姦淫するな」と命じられている。しかし、わたしは言うておく。みだらな思いで他人の妻を見る者はだれでも、既に心の中でその女を犯したのである。²²⁾

上記引用の箇所を理解するために、まず、キリスト教で言う、「姦淫」というのは何を指すのかみてみる必要がある。關根清三によれば、姦淫とは、「旧約では、男が人妻と交わって他の男の結婚を犯すこと、あるいは妻が夫以外の男と交わって自分の結婚を犯すこと」であり、「新約では、結婚の無垢性と不可侵性を侵犯する、婚外の性交渉、ひいては性的不品行一般に至るまで姦淫」であると述べる。²³⁾このような知識をもとに上の「マタイによる福音書」5章27-28節を再読すれば、イエスの言いたいことは「旧約では、〈姦淫するな〉と言っている。その〈姦淫の罪〉は旧約では、他人の妻と交わった場合、成立するのである。しかし、イエス自身は、〈みだらな思いで、他人の妻を見るものは、既に心の中で姦淫の罪を犯したこののである〉と規定する」ということになる。イエスの言う罪は、罪になる行動を起こした場合だけではなく、心の中で考えただけの場合でも含まれるのである。

「マタイによる福音書」5章27-28節の言葉は、心の中での考えまでも罪になるという「罪」の

21) 同上、373-374頁。

22) 『新約聖書』「マタイによる福音書」5章27-28節。

23) 關根清三『倫理の探索—聖書からのアプローチ—』中公新書、2002年、150頁。

観念の厳しさだけを考えていくと、本章の冒頭で引用した「クローディアスが、兄の首を絞めた」と想像し、悩む場面」との類似性に気付くことができるだろう。実際に、先行研究において、本多秋五はこの箇所に触れ、「〈すべて色情を懷きて女を見るものは、既に心のうち姦淫したるなり。〉という倫理の残響を聞く思いがする」²⁴⁾と指摘している。しかし、本多はこのような印象を述べるに止まり、『クローディアスの日記』では基督教の〈罪の意識〉が作品のモチーフとして機能していることに言及していない。本多は、「『クローディアスの日記』はモチーフのわからない小説である」²⁵⁾と述べており、上記の『クローディアスの日記』の場面においても「おそらく作者の夢中心理の嵌入だろうが、想像をここまで持って行かねば止まないのがノイローセ的である」²⁶⁾と述べ、この小説の主人公にみられる内省的側面を指摘するだけである。

そうした『クローディアスの日記』の心理小説的側面を認めないわけではない。しかし、『クローディアスの日記』には、〈罪の意識〉と関連し、基督教の倫理が深く根を下ろしている作品であると考えられる。

話を進めよう。このように罪の成立条件を心の動機で探る基督教の「罪」の観念を把握した上で、本章の冒頭に引用した『クローディアスの日記』の箇所におけるクローディアスの〈罪の意識〉に目を向けると、それがいかに、基督教の罪の観念に類似しているかが明白になる。クローディアスが、兄の首を絞めたと想像しただけで、まるで実際に兄の首を絞めたように、〈罪の意識〉に悩むということは、クローディアスという人物が、意識しているかいないかに関わらず、基督教での〈罪の観念〉を受け入れていることを意味する。

基督教において、〈罪の概念〉がいかにその教義と深く関わっているのかは「悔い改めよ、天の國は近づいた」とイエスが説教を重ねたことから確認できると思う。イエスの考えによれば、すべての人間は悔い改めねばならない罪人である。基督教において、神は人間一人一人の心の深部までを見通すことができる存在であり、その神の観点を人間一人一人に適用した際、悔い改めなくてもよい人間はだれ一人存在しないのである。だからこそ、人間は神の前で悔い改めることによってのみ赦されるということになるだろう。

これを説明するため、ここで、もう一度『新約聖書』を引用したい。

「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。」そしてまた、身をかかめて地面に書き續けられた。これを聞いた者は、年長者から始まって、一人また一人と、立ち去ってしまい、イエスひとり、真ん中にいた女が残った。イエスは、身を起こして言われた。「婦人よ、あの人たちはどこにいるのか。だれもあなたを罪に定めなかったのか。」女が、「主よ、だれも」と言うと、イエスは言われた。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい

24) 本多秋五『志賀直哉』上、74頁。

25) 同上、71頁。

26) 同上、75頁。

。これからは、もう罪を犯してはならない」²⁷⁾

上記引用の箇所は、「ヨハネによる福音書」8章7-11節に述べられている「姦通の現場でとらえられた女の話」である。この話はいろいろな角度から解釈できると思われるが、ここで指摘したいのは、「罪を犯したことのない者が、まず、この女に石を投げなさい」というイエスの言葉に人々が立ち去ってしまうという点である。イエスは、上記引用の箇所で、「罪」という言葉を、心の中での罪を含むものとして用いたに違いない。また、人々も、イエスの言葉の中の「罪を犯したことのない者」という言葉の「罪」を、心の中での罪と認識したと考えられる。

このようにキリスト教においては、「罪」の概念を心の深部においての「罪」を含むものとして規定するため、人間は神の前で、悔い改めることによるのみ救済できると言っていると考えられる。

話を『クローディアスの日記』に戻そう。『クローディアスの日記』の中でのクローディアスが敬虔なキリスト教の信者だったかどうかは、作品を読んだ限りではわかりにくい。しかし、クローディアスが見せる〈罪の意識〉は、キリスト教の罪の観念に近いものである。志賀直哉がクローディアスという人物をキリスト教的な観念の持ち主のように造型しようとしたのかどうかは不明である。しかし、少なくともクローディアスは、いわゆる世間の慣習や良心というものに悩まされる人物であり、また、キリスト教的な罪の観念にも悩まされる人物として描かれていると言える。

『クローディアスの日記』が、心の中での罪を問題視するという点から、キリスト教との関連がみられるのに對して、『范の犯罪』は、二つの観点から、キリスト教との関連を読み取ることができると考えられる。一つは范が無罪になるために、〈正直〉に訴えるということ、もう一つは、なぜ、この小説の裁判官は范を無罪だと判決するのかということである。まず、その一点目から、みてみたい。

只今の私にとっては無罪にならうといふのが總てです。その目的の爲には、自分を欺いて、過失と我を張るよりは、何方か分らないといつても、自分に正直でゐられる事の方が遙に強いと考へたのです。私はもう過失だとは決して斷言しません。そのかはり、故意の仕業だと申す事も決してありません。
(『范の犯罪』、90頁)

上記引用の箇所では、范は妻の死について、故意によるものだとも、また、過失によるものだとも言わない。妻の死がそのどちらによるものなのかは、彼自身にもわからないのである。問題は、無罪になるための彼の方法であるが、それは、〈正直に〉なることによって、無罪を勝ち取るというものである。このような考え方は、人々の偽善性を痛烈に批判したイエスの考え

27) 『新約聖書』「ヨハネによる福音書」8章7-11節。

方と通じるところがある。

「人を裁くな。あなたがたも裁かれないようにするためである。あなたがたは、自分の裁く裁きで裁かれ、自分の量の秤で量り与えられる。あなたは、兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか。兄弟に向かって、〈あなたの目からおが屑を取らせてください〉と、どうして言えようか。自分の目に丸太があるではないか。偽善者よ、まず、自分の目から丸太を取り除け。」²⁸⁾

上記引用の「マタイによる福音書」において、イエスは人を裁く権利は人間にはないということ、その権利をもっているのは神しかないということを述べているのであるが、その論理の根據になっているのは、人間の偽善性である。もちろん、この偽善性は捨てなければならないと述べているのであるが、イエスが強調しているのは、人間が自分の心を振り返り、偽善性を捨てること、言い換えれば〈神の前で正直になること〉によって、救済されるということである。

このような『新約聖書』の箇所を視野に入れて、『范の犯罪』をみると、范が自分の正直さを見せるのは、自分が偽善者でないことの証明にほかならないのである。いったいなぜ、彼は裁判官にこれを証明しようとしたのだろうか。この点がこの小説の大きなポイントになる。

ここで、范が考える「罪」への観点が、世間の罪への観点と決定的に違うことが確認できる。世間一般の法的な観点から言うと、妻の死が過失によるものだったと主張したほうが、判決では范に有利に働くだろう。しかし、范は少しもそのように主張していない。范が考える「罪」というのは、どこまでも、“sin”としての罪、つまりキリスト教的な神の前での罪という次元のものである。范は、神の前で正直になることによって、赦されるという観点をもっていると考えられる。こうした分析から、范にとって、「裁判官」とは、人間を裁くことができるキリスト教の神に該当するような人物であることが、浮き彫りになってくる。そこで、この小説での「裁判官」という人物について考察する必要がある。

「所でお前には妻の死を悲しむ心は少しもないか？」

「全くありません。私はこれまで妻に對してどんな烈しい憎みを感じた場合にもこれ程快活な心持で妻の死を話し得る自分を想像した事はありません」

「もうよろしい。引き下つてよし」と裁判官は云つた。范は黙つて少し頭を下げると此室を出て行つた。

裁判官は何かしれぬ興奮の自身に湧き上がるのを感じた。

彼は直ぐペンを取り上げた。そして其場で「無罪」と書いた。

(『范の犯罪』、91頁)

28) 『新約聖書』「マタイによる福音書」7章1-5節。

この小説は、裁判制度という点から考えれば、不思議な小説であることがわかる。この裁判では、裁判官は存在するものの、検事も、弁護士も、陪審員も登場しない。つまり、この小説にみられる裁判制度は近代的な裁判制度ではないことがうかがえる。しかし、だからといって、この小説が背景を前近代的な時代に行っているとも言えない。近代以前のある時期を小説の時間的背景に行っているという根拠はどこにもなく、正確には、むしろ、近代を背景に行っていると考えられる。この小説には警察官、裁判官が登場しているが、警察と裁判官が近代の司法制度を支える柱的存在であることは明らかだからである。

この小説には矛盾が存在している。それは、この小説は時代背景としては近代でありながら、この小説における裁判は、近代の裁判制度に従って進行しているのではないということである。いったい、検事も被告も陪審員もいないまま、被告と一対一で対話を交わし、その場で「無罪」を決定する裁判官というものが有り得るだろうか。

さらに、もう一つ指摘したい点がある。それは、近代の裁判制度によるならば、曲芸の実演中ナイフで妻を刺し、殺した范の行爲は、過失によるものであれ、故意によるものであれ、明らかに有罪になる行爲なのだという点である。しかし、このような点をこの小説の裁判官は、まったく考慮していないのである。このようなことから、ここでの裁判官が「人を裁く」行爲は、近代的な裁判官による審判ではなく、まったく別の立場による行爲だということがわかる。それは、キリスト教的な意味での「人を裁く」行爲なのである。

自分が偽善者でないことを見せようとする范という人物の考え方が、キリスト教的な考え方であることは、すでに指摘した。同様に范の話聞いて、そこに偽善性がないことを認め、「無罪」を決定する裁判官の考え方も、世間の法律に基づいたものではなく、キリスト教で言われる「罪」に対する考え方そのものになっているのである。

ただし、この小説がこのようにキリスト教的な「罪」の概念と深く関わってはいても、主人公范が決してキリスト教の倫理を忠実に守っている人物であるとは言えない。なぜなら、范は妻を死に至らせた彼自身の行爲を悔い改めていないからである。この点、范を、敬虔なクリスチャンだと言うことはできない。妻の死を快活に話す范という人物は、アンチクリスチャンとも言える人物なのである。

范は自我を何より大事に考えるという点で、キリストの倫理を体現している人物ではないが、その生命概念や罪の概念においては、キリスト教の考え方を見せていると考えられる。

〈結び〉

以上、『クローディアスの日記』と『范の犯罪』という小説をキリスト教との関連という観点から考察してみた。

『クローディアスの日記』と『范の犯罪』の主人公、クローディアスと范は、意味のある人生、または「本統の生活」を営みたいという願望をもっており、「生きながら死人」になるような生活から抜け出したいと思っている。「本統の生活」を積極的に追求する主人公たちの倫理観には、キリスト教の生命観の影響があると考えられる。キリスト教の『新約聖書』では、生物學的生命としての「プシュケー」と、キリスト教を信じることによって獲得された永遠の生命としての「ゾーエー」を明確に分けて考えている。〈意味のある人生〉對〈生命力に満ち溢れる人生〉を意味すると考えられる「本統の生活」は、生物學的生命の限界を乗り越え、魂が救済され、永遠に生き続けられることを意味する「永遠の生命」というキリスト教の生命観念が変容されたものと見ることが出来る。

兩作品には、キリスト教の罪の観念が横たわっていると考えられる。例えば『クローディアスの日記』のクローディアスは、兄の首を絞めたと思っただけで、実際に兄の首を絞めたような罪の意識に襲われる。これは、罪の成立条件を心の動機で探るキリスト教的な罪の観念に酷似しているといっただろう。また、『新約聖書』において、イエスは人々の偽善性を戒め、神へ服従することによってのみ、人々は救済されることを説破しているが、このような人々の〈偽善性〉への戒めは、〈正直に〉自分を見せることによって無罪を勝ち取ろうとする『范の犯罪』の主人公范の論理に一脈通じると考えられる。さらに、范の話聞いて、そこに〈偽善性〉が潜んでいないことを認め、その場で無罪を決定する裁判官は、キリスト教の教理の中では、人間を裁くことができる唯一の存在であるキリスト教の神様にあたると思える。

ただし、確認しておきたいことは、兩作品の主人公たちは、決して敬虔なクリスチャンではないという点である。彼らの倫理観を、〈神の前での懺悔〉を何より重んじるキリスト教の倫理観と同一視することはできない。自分自身を何より大事に思う彼らの倫理観には、傲慢ささえも漂っている。しかし、一方において、彼らは自分自身の心を振り向き、罪の意識に悩まされたり、〈偽善性〉を捨て、〈正直さ〉を見せることによって赦されることを目指すなど、〈神の前での謙虚さ〉を見せているのも事実である。

志賀直哉が到達した「自己中心主義」の頂点に位置すると考えられる兩作品は、志賀の「自己中心主義」の本質を明確に見せてくれると考えられる。それは「自己中心主義」というものは、いかにも自分を大事にし、場合によっては、まわりの人々との葛藤や衝突も辞さないという倫理観ではあるが、一方においては、自分自身の心への謙虚な振り向きを含むものであるということである。志賀の「自己中心主義」は傲慢さと謙虚さが同時に存在するアンビバレントな倫理観だったのである。

【参考文献】

- ・井上良雄 「芥川龍之介と志賀直哉」、『日本文学研究資料叢書 志賀直哉』、有精堂、1970年、139頁
- ・旧約新約聖書大事典編集委員会編 『旧約新約聖書大事典』、教文館、1989年、137頁
- ・共同譯聖書實行委員會 『聖書新共同譯』、日本聖書協會、1987年
- ・小林秀雄 「志賀直哉—世の若く新しい人々へ—」、『文芸讀本 志賀直哉』、河出書房新社、1976年、10-17頁
- ・佐藤義雄 「揺曳する〈自我〉—志賀直哉『クローディアスの日記』など—」、明治大學文學部紀要『文芸研究』第78号、1997年9月、205頁
- ・『志賀直哉全集』第二卷、岩波書店、1973年、4頁、10-11頁、21頁、85-86頁、90-91頁
- ・『志賀直哉全集』第八卷、岩波書店、1974年、7頁
- ・關根清三 『倫理の探索—聖書からのアプローチ—』中公新書、2002年、150頁
- ・鶴谷憲三 「クローディアスの形象化—『クローディアスの日記』を中心として—」、梅光女學院大學日本文學會『日本文芸研究』第27号、1991年3月、133-140頁
- ・中村元監修、峰島旭雄責任編集『比較思想事典』、東京書籍、2000年、373-374頁、451頁
- ・本多秋五 『志賀直哉』上、岩波新書、1990年、71頁、74頁、75頁、78頁、102頁
- ・宮越勉 「志賀直哉—尾道行前後の生活と文學—」、明治大學文學部紀要『文芸研究』第43号、1980年、170頁、184頁

要 旨

本論文では、『クローディアスの日記』と『范の犯罪』にみられる生命観、罪の意識などを根據に、兩作品がキリスト教との関連の上で把握できることを提示した。

キリスト教の『新約聖書』では、生物學的な生命としての「プシュケー」と、キリスト教を信じることによって獲得された永遠の生命としての「ゾーエー」を明確に分けて考えている。〈意味のある人生〉對〈生命力に満ち溢れる人生〉を意味すると考えられる、兩作品のキーワードである「本統の生活」は、生物學的な生命の限界を乗り越え、魂が救済され、永遠に生き續けられることを意味する「永遠の生命」というキリスト教の生命觀念が変容されたものと見ることができる。

兩作品には、キリスト教の罪の觀念が横たわっていると考えられる。『クローディアスの日記』のクローディアスは、兄の首を絞めたと想像するだけで、實際に兄の首を絞めたような罪の意識に襲われる。これは、罪の成立條件を心の動機で探るキリスト教的な罪の觀念に酷似している。また、『新約聖書』において、イエスは人々の偽善性を戒め、神へ服従することによってのみ、人々は救済されることを説破しているが、このような人々の〈偽善性〉への戒めは、〈正直に〉自分を見せることによって無罪を勝ち取ろうとする『范の犯罪』の主人公范の論理に一脈通じると考えられる。さらに、范の話聞いて、そこに〈偽善性〉が潜んでいないことを認め、その場で無罪を決定する裁判官は、キリスト教の教理の中では、人間を裁くことができる唯一の存在であるキリスト教の神様にあたると考えられる。

このように「自己中心主義」を代表する兩作品は本質的なところにおいて、キリスト教と深く関わっていることを論証した。

キーワード：自己中心主義、キリスト教、生命、ゾーエー、罪、赦し

투 고 : 2005. 5. 31
1차 심사 : 2005. 6. 11
2차 심사 : 2005. 7. 2

住 所 : (449-943) 경기도 용인시 구성읍 언남리 490번지 신일아파트 106-702

電 話 : 010-3310-5545

e-mail : kgsiga321@hanmail.net